THE ANNUAL REPORTS OF
HEALTH, PHYSICAL EDUCATION
AND SPORT SCIENCE
VOL.12.13-22.1993

原　著

レスリング競技のTACTICSの研究
——5分間の試合時間について——

A stucy of tactics in wrestling
− With regard to bouts of five-minuteduration −

朝 倉 利 夫

Toshio ASAKURA

1) The following information with regard to (bouts of five-minute duration) was obtained from an analysis of results of the matches in the 1993 All-Japan Collegiate Freestyle Wrestling Dual Meet Championship final and the finals of the National Trial for 1993 World Championships.

(1) In analyzing the techniques, the frequency of six types of techniques in the standing position were studied in wrestlers from both Kokushikan University and Nippon Physical Education College (NPEC). Among these, the single leg takedown resulted in points 80 percent of the time. On the mat, the frequency of four types techniques employed by NPEC wrestlers was studied with the gut wrench remarkably high. In the national team trials, winning wrestler employed eight types of techniques in the standing position. As for frequency, the single leg takedown and double leg takedown were used most often and resulted in points 50 percent of the time.

(2) Regarding points scored and lapsed time, Kokushikan University scored a total of 21 points in the standing position and 29 points on the mat with one pin and one technical fall. As for scoring the first point(s), NPEC wrestlers scored first in six of the nine matches and won five of the bouts. As for the number of points scored in the first two minutes of the bouts, Kokushikan University scored 7 points and NPEC scored 16 points. In the first three minutes of the bouts, Kokushikan University scored 15 points and NPEC scored 32 points. It can be understood that control of the bout depends upon and the chances of victory are greatly enhanced by scoring points in the first three minutes of a bout.

In the national team trails, the winning wrestlers scored a total of 45 points, 24 points in the standing position and 21 points on the mat. Losing wrestlers scored a total of 19 points, 13 points in the standing position and six points on the mat. In the first minutes of the bouts, winning wrestlers scored 29 points and losing wrestlers did not

国士舘大学体育学部レスリング研究室（Lab. of Wrestling, Faculty of Pysical Education, Kokushikan University）

score a point. In the first three minutes of the bouts, winning wrestlers scored 29 points and losing wrestler scored seven points. In a five-minutes match, scoring the first points in the first three minutes of the bout allow the wrestler to control the bout to his advantage. In the 10 weight categories, seven of the wrestler who took the lead early won their matches.

(3) Regarding the deployment of techniques in the par terre position, Kokushikan University received 10 chances to take the advantage position on the mat from passivity calls, but scored no offensive points in the par terre position. Nippon Physical Education College (NPEC) received seven chances to take the advantage position on the mat from passivity calls and scored 15 points using only the gut wrench attack. The deployment of techniques in the par terre position reveals the importance of the gut wrench on offense and defense.

In the national team trials, the deployment of techniques in the par terre position was limited. Hiratsuka in the 74-kilogram category controlled his match with the use of a crotch lift that also yielded a bonus point for amplitude. It can be understood that in weight categories with a balance of strength and technique that the level of defence for the wrench is high.

は じ め に

国際アマチュアレスリング連盟（FILA）は、毎オリンピック競技大会を契機に、レスリング競技の時間変更とルール改正を実施してきている。

レスリング競技の時間変遷

オリンピック	年	試合時間
アムステルダム	1928	無制限
ロサンゼルス	1932	20分（6・4・4・6）
ベルリン	1936	15分（6・3・3・3）
中　止	1940	―――
中　止	1944	―――
ロンドン	1948	15分（6・3・3・3）
ヘルシンキ	1952	〃（　〃　）
メルボルン	1956	〃（　〃　）
ローマ	1960	12分（6・2・2・2）
東　京	1964	10分（5・1・5）
メキシコ	1968	〃（　〃　）
1969年よりマットが四角形から円形になる。		
ミュンヘン	1972	9分（3・1・3・1・3）
1975年よりパシビティゾーンができた。		
モントリオール	1976	9分（3・1・3・1・3）
モスクワ	1980	〃（　〃　）
ロサンゼルス	1984	6分（3・1・3）
ソウル	1988	〃（　〃　）
バルセロナ	1992	5分

FILAは、1993年1月1日より新ルールの採用を決定した。その主な改正点は以下の6項目である。

1. トーナメント・敗者復活戦複合方式（決勝戦出場者<A・B両ブロックの1位>に敗れたレスラーは<敗者復活戦>に出場できる。）
2. 3点ノルマ制（正規の5分間で両選手ともノルマの3点を得点していない場合は、3分間の延長になりノルマ達成時点で終了。ノルマ達成できなければ3名の審判団が協議して勝敗を決定する。）
3. テクニカルフォール（得点差が10点になった時点で試合終了。）
4. デンジャー・ポジション・ボーナスポイント（危険な状態に相手を5秒以上押えこんだ場合1ポイントが加算される。）
5. エスケープ・ボーナスポイント（パーテールレスリングの状態からコントロールを解除しス

タンドして相手と対向した場合に1ポイントが加算される。）

6. ディフィカルト・リフトアップ・ボーナスポイント（一方のレスラーが相手レスラーをパーテールポジションから、完全に浮かし持ち上げて技術展開を行ない5点か3点を得た場合に1ポイントが加算される。）

筆者は、この新ルール改正に伴ないレスリングの競技力向上を目的に、1993年度全日本学生レスリングフリースタイル王座決定戦の国士舘大学対日本体育大学の試合と、1993年度世界レスリング選手権大会・国内選考会（フリースタイル）各階級決勝戦の試合を例にとり、試合時間5分間に於ける技術分析から取得点と時間経過の関係と、Parterreからの技術展開を調査研究した。今後、日本選手と世界大会出場選手の技術を比較することで日本独自のTacticsを模索しようとするものである。

調 査 方 法

本研究の調査対象とした試合は、第27回1993年度全日本学生レスリングフリースタイル王座決定戦（団体対抗戦、9階級による。）国士舘大学対日本体育大学の試合及び、1993年度世界レスリング選手権大会国内選考会のフリースタイル10階級（48kg級・52kg級・57kg級・62kg級・68kg級・74kg級・82kg級・90kg級・100kg級・130kg級）の各階級決勝戦の試合を対象とした。これらの試合全課程をVTR収録し、テレビ画面に再生して分析した。その際以下の3点について重点的に調査・検討した。

（1）技術分析について。

（2）取得点と時間経過について。

（3）Parterreからの技術展開について。

調査対象とした選手の氏名・過去の戦歴は、表1・表2に示した。取得点と時間経過については、図1（①～③）・図2（①・②）に示した。試合時間に於ける1分間毎の取得点経過は、図3～8に示した。

結 果 と 考 察

1）技術分析（全日本学生レスリングフリースタイル王座決定戦）、国士舘大学の使用技術は、スタンドレスリングの「片足タックル6回、取得点6点」・「両足タックル1回、取得点3点」・「足首タックル1回、取得点1点」・「飛行機投げ1回、取得点3点」・「がぶりからの背後廻り1回、取得点1点」・「場外逃避1回、取得点1点」であった。グランドレスリング（寝技）については、「横崩し3回、取得点6点」であった。日本体育大学の使用技術は、スタンドレスリングの「片足タックル12回、取得点12点」・「両足タックル2回、取得点2点」・「首投げ1回、取得点2点」・「内がけ1回、取得点1点」・「投げ技のカウンター1回、取得点1点」であった。グランドレスリングについては、「横崩し12回、取得点23点」・「横崩しからの巻き込み1回、取得点2点」・「腕取り返し1回、取得点2点」・「デンジャー・ポジション・ボーナスポイント2回、取得点2点」であった。（フォール1回48kg級・テクニカルフォール1回74kg級）

これらの使用技術結果から、スタンドレスリングにおいて国士舘大学、日本体育大学とも6種類の技術を使用していた。頻度数では、片足タックルからの攻撃が特に高く、取得点でも全体の80％を示していた。すでに多くの研究者から報告されている様に、フリースタイルにおいての攻撃法はタックルからなる。今大会の試合において、日本体育大学の攻撃法は、タックルに始まりタックルに終わるパターンであった。グランド技術においては、国士舘大学が1種類、日本体育大学が4種類の技術を使用していた。頻度数では、横崩しの使用頻度が圧倒的に高かった。

世界選手権・国内選考会の技術分析、勝者の使用技術は、スタンドレスリングの「片足タックル6回、取得点6点」・「両足タックル4回、取得点6点」・「ハイクラッチ2回、取得点2点」・「首投げ1回、取得点3点」・「ゴービハインド1回、取得点1点」・「がぶり返しを押さえる1回、取得点2点」

表1．国士舘大学対日本体育大学の過去の戦歴

階級	大学	氏名	過去の戦歴	大学	氏名	過去の戦歴
48kg	国士舘大学	佐藤謙二	全日本学生選手権大会3位	日本体育大学	中村吉元	全日本エスポアール選手権大会1位
52kg		山口譲司	全日本学生選手権大会（48kg）1位		佐藤公一	全日本学生選手権大会1位
57kg		横瀬二郎	全日本エスポアール選手権大会1位		星　政宏	全日本学生選手権大会1位
62kg		吉田仲也	東日本学生春季新人戦2位		矢山裕明	全日本学生選手権大会（57kg）1位
68kg		和田貴広	1993年・アジア選手権大会（62kg）2位		小柴健二	全日本学生選手権大会1位
74kg		友寄隆康	全日本学生選手権大会3位		片山貴光	全日本学生選手権大会1位
82kg		高橋　博	世界選手権代表選考会6位		横山秀和	全日本学生選手権大会1位
90kg		吉田英昭	1992年・全日本大学選手権大会（100kg）3位		吉田幸司	全日本学生選手権大会1位
130kg		茂野充宏	全日本学生選手権大会1位		篠崎正二	東日本春期新人戦1位

表2．世界レスリング選手権大会・国内選考会選手の過去の戦歴

階級	氏名	所属	過去の戦歴	氏名	所属	過去の戦歴
48kg	佐藤謙二	国士舘大学（4年）	1992年・全日本学生選手権大会2位	山下　忍	香川県スポーツ振興財団	1992年・国民体育大会1位
52kg	笹山秀雄	自衛隊体育学校	1992年・全日本選手権大会2位	佐藤公一	日本体育大学（3年）	1992年・全日本選手権大会1位
57kg	花田秀実	自衛隊体育学校	1993年・アジア選手権大会代表	奥山恵二	ユニデン	1992年・ﾊﾞﾙｾﾛﾅｵﾘﾝﾋﾟｯｸ代表
62kg	坪井　勇	男山酒造	1992年・全日本学生選手権大会2位	吉田　実	エムビーシー	1992年・全日本選手権大会3位
68kg	安達　巧	トヨタ・ビスタ東京	1992年・ﾊﾞﾙｾﾛﾅｵﾘﾝﾋﾟｯｸ代表（62kg）	太田拓弥	日本体育大学研究生	1992年・全日本社会人選手権大会（74kg）1位
74kg	平塚洋充	日本大学大学院	1993年・アジア選手権大会代表	小野瀬哲也	山梨学院大学（3年）	1992年・全日本学生選手権大会（82kg）2位
82kg	横山和之	日本体育大学（4年）	1993年・アジア選手権大会代表	原　喜彦	新潟北高校教員	1992年・ﾊﾞﾙｾﾛﾅｵﾘﾝﾋﾟｯｸ代表（74kg）
90kg	藤田和之	新日本プロレス	1993年・アジア選手権大会代表	吉田幸司	日本体育大学（3年）	1992年・全日本学生選手権大会3位
100kg	浅沼俊幸	自衛隊体育学校	1993年・アジア選手権大会代表	野々村孝	香川県スポーツ振興財団	1992年・ﾊﾞﾙｾﾛﾅｵﾘﾝﾋﾟｯｸ代表（グレコ）
130kg	小幡弘之	警視庁	1988年・ソウル五輪代表 1992年・国民体育大会1位	茂野充宏	国士舘大学（4年）	1992年・全日本学生選手権大会1位

・「あびせ倒し1回。取得点1点」・「タックル返し1回、取得点1点」・「がぶりから背後に廻る1回、取得点1点」・「がぶり返しのカウンター1回、取得点1点」であった。グランドレスリング（寝技）については、「横崩し6回、取得点10点」・「レッグホールド2回、取得点6点」・「デンジャー・ボーナス・ポイント2回、取得点2点」・「股さき1回、取得点2点」・「スイッチ1回、取得点1点」であった。敗者の使用技術は、スタンドレスリングの「場外逃避3回、取得点3点」・「片足タックル2回、取得点2点」・「あびせ倒し1回、取得点2点」・「がぶり返し1回、取得点2点」・「腰投げ1回、取得点1点」・「ゴービハインド1回、取得点1点」・「両脇を差して背後に廻る1回、取得点1点」・「足首タックル1回、取得点1点」であった。グランドレスリングについては、「横崩し2回、取得点3点」・「グランドのカウンター1回、取得点2点」・「スイッチ1回、取得点1点」であった。

勝者と敗者の使用技術頻度では、スタンドレスリングにおいて勝者選手が11種類、敗者選手

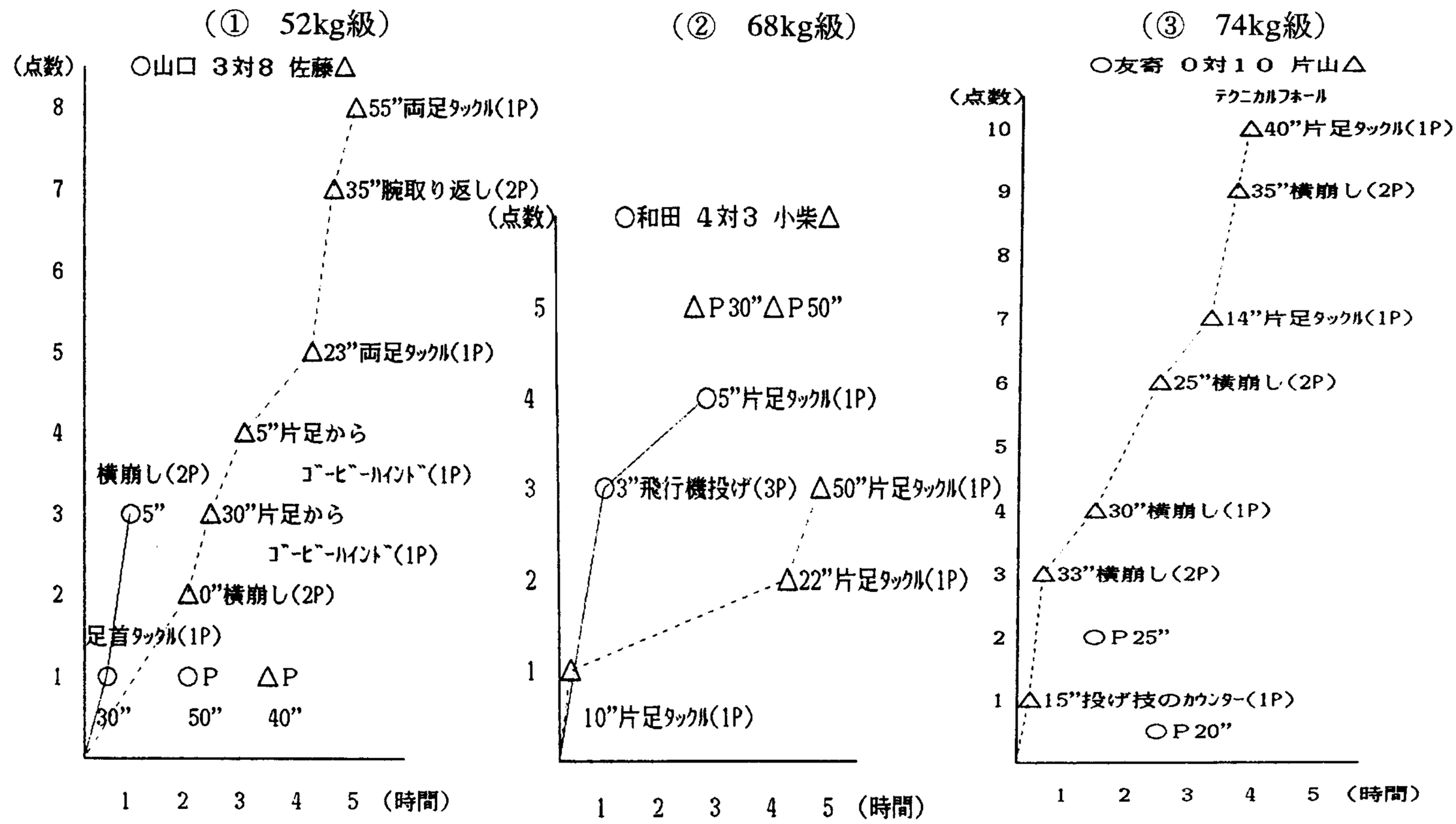

図1　1993年度　全日本学生レスリングフリースタイル王座決定戦
○国士舘大学対日本体育大学△の取得点と時間経過

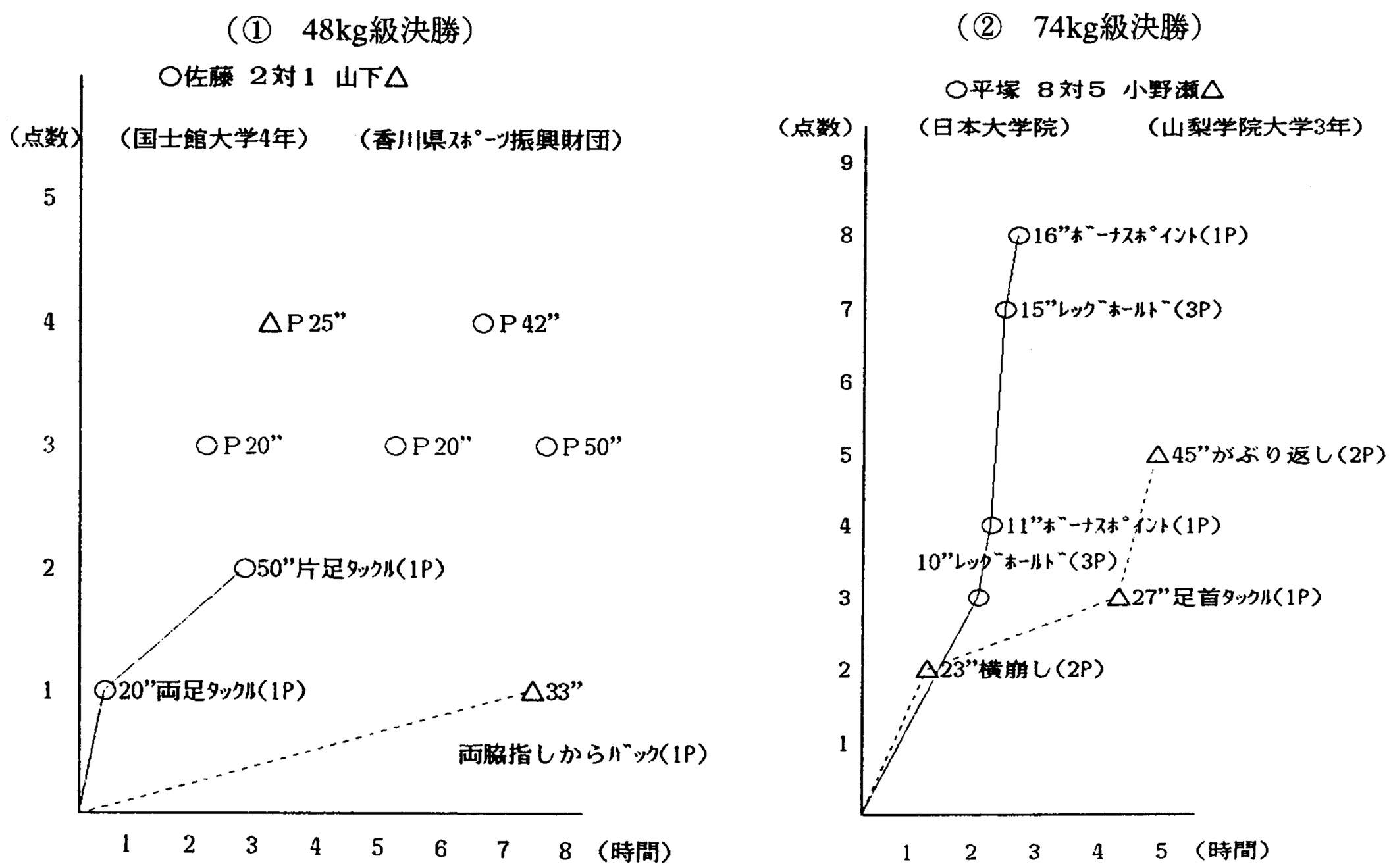

図2　1993年度　世界選手権・国内選考会フリースタイル10階級決勝戦の
○勝者選手と敗者選手△の取得点と時間経過

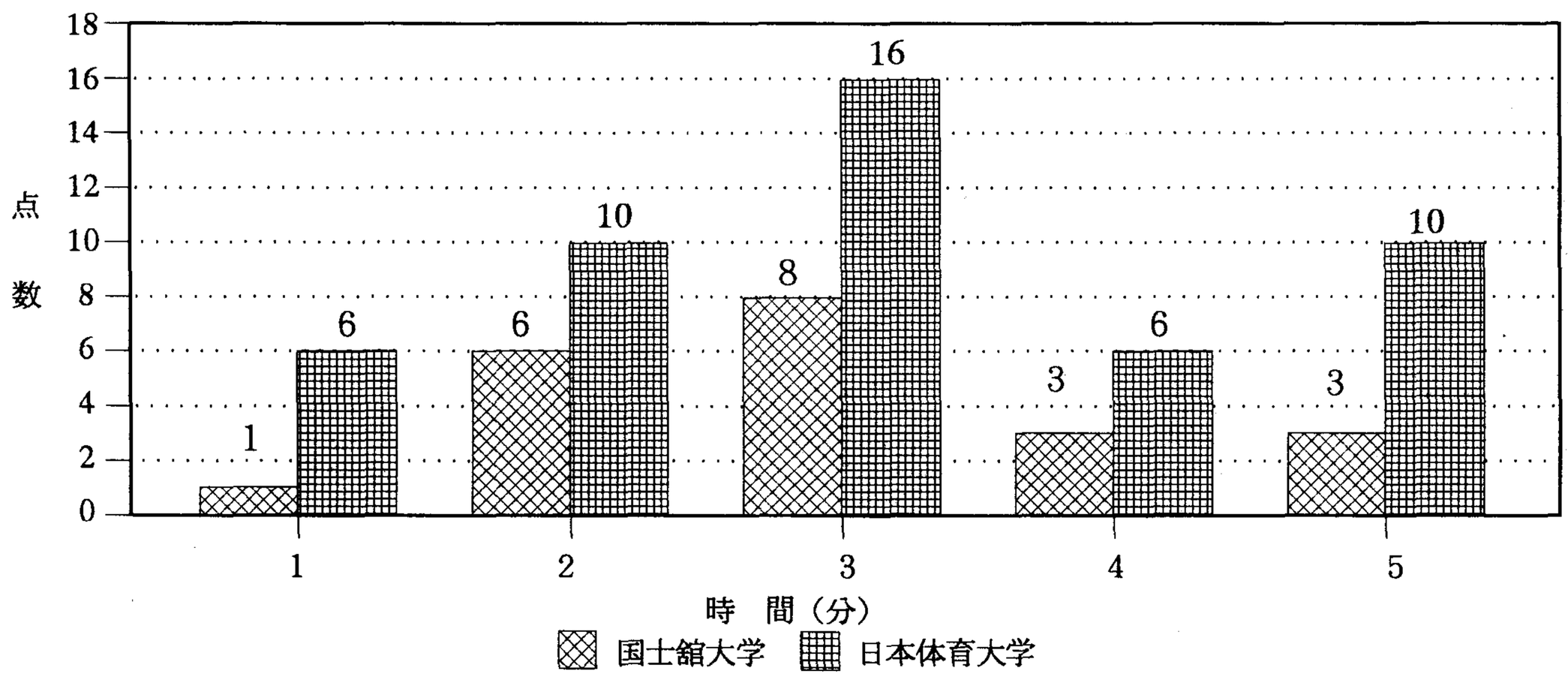

図3　試合時間における1分毎の国士舘大学対日本体育大学の取得経過

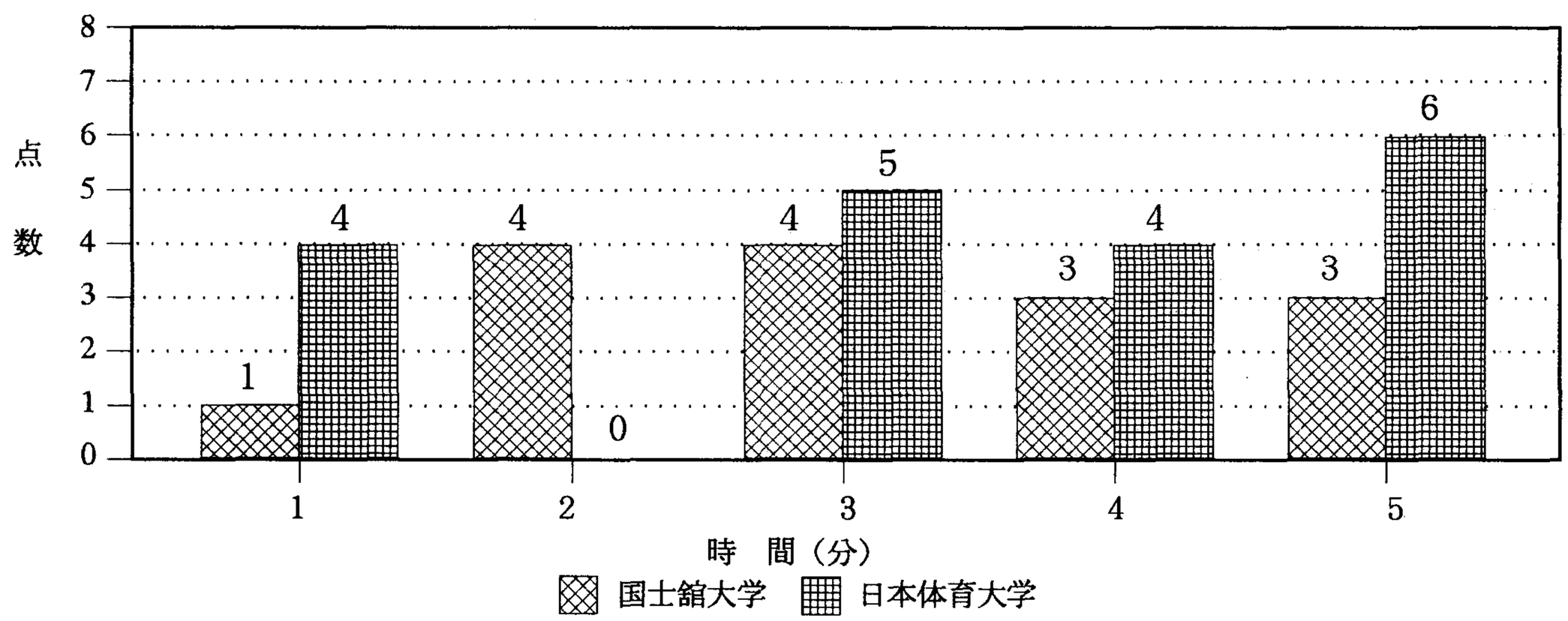

図4　試合時間における1分毎のスタンドの取得経過

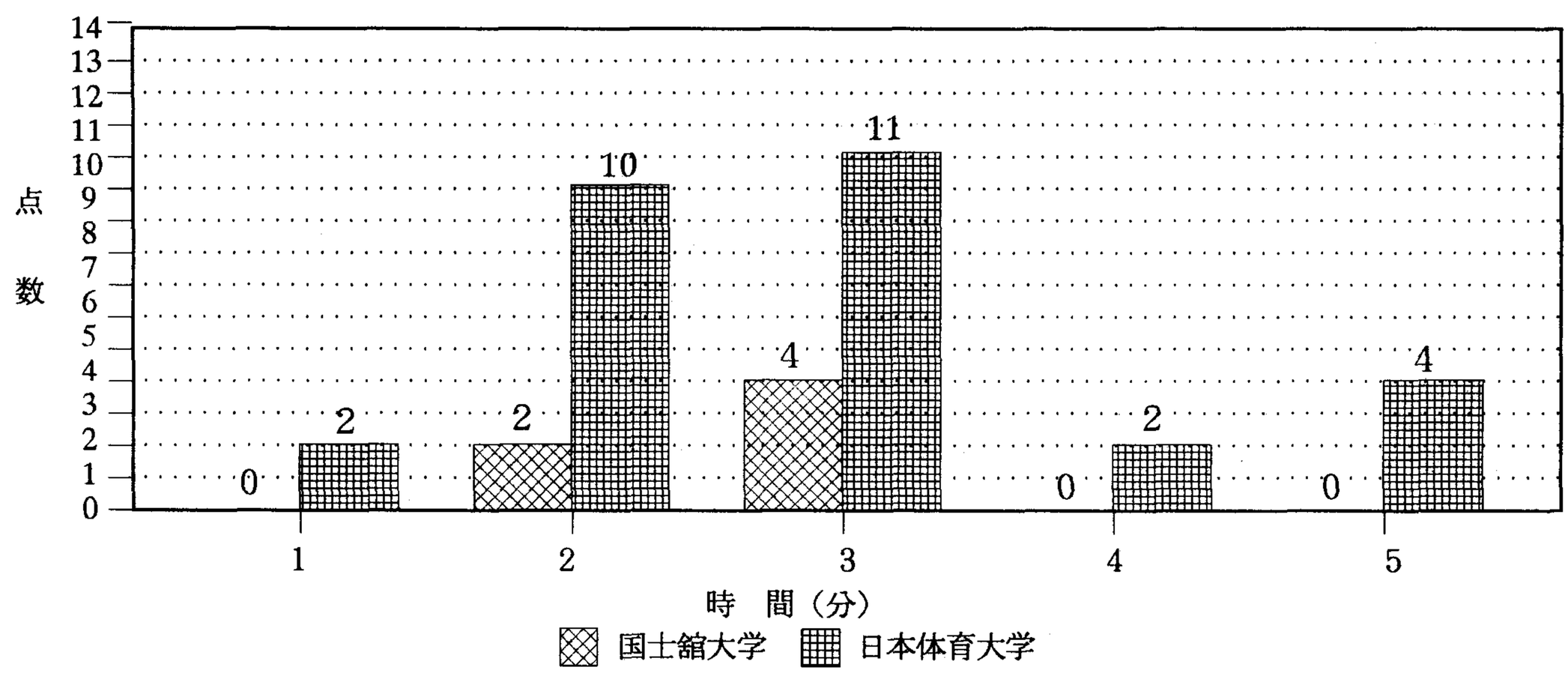

図5　試合時間における1分毎のグランドの取得経過

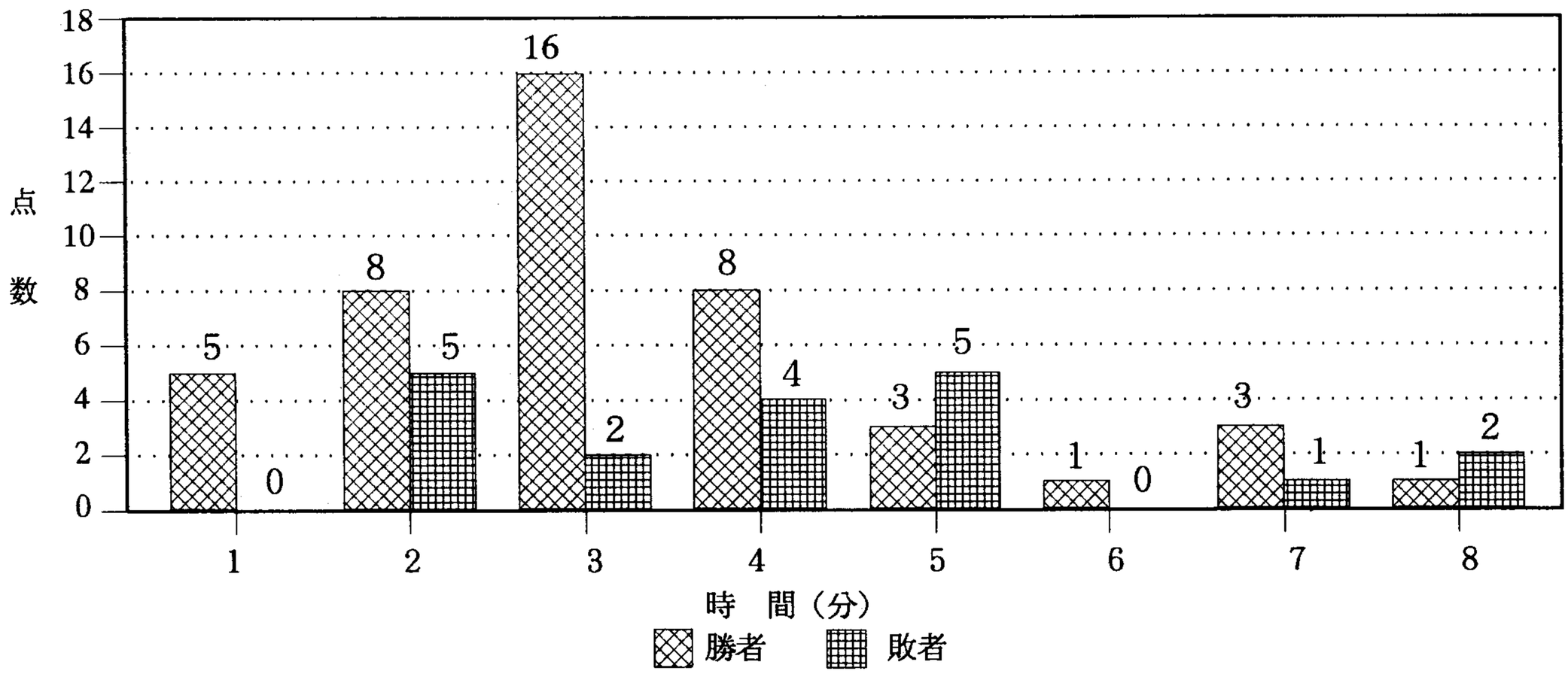

図6　試合時間における１分毎の勝者・敗者選手の取得経過（国内選考試合）

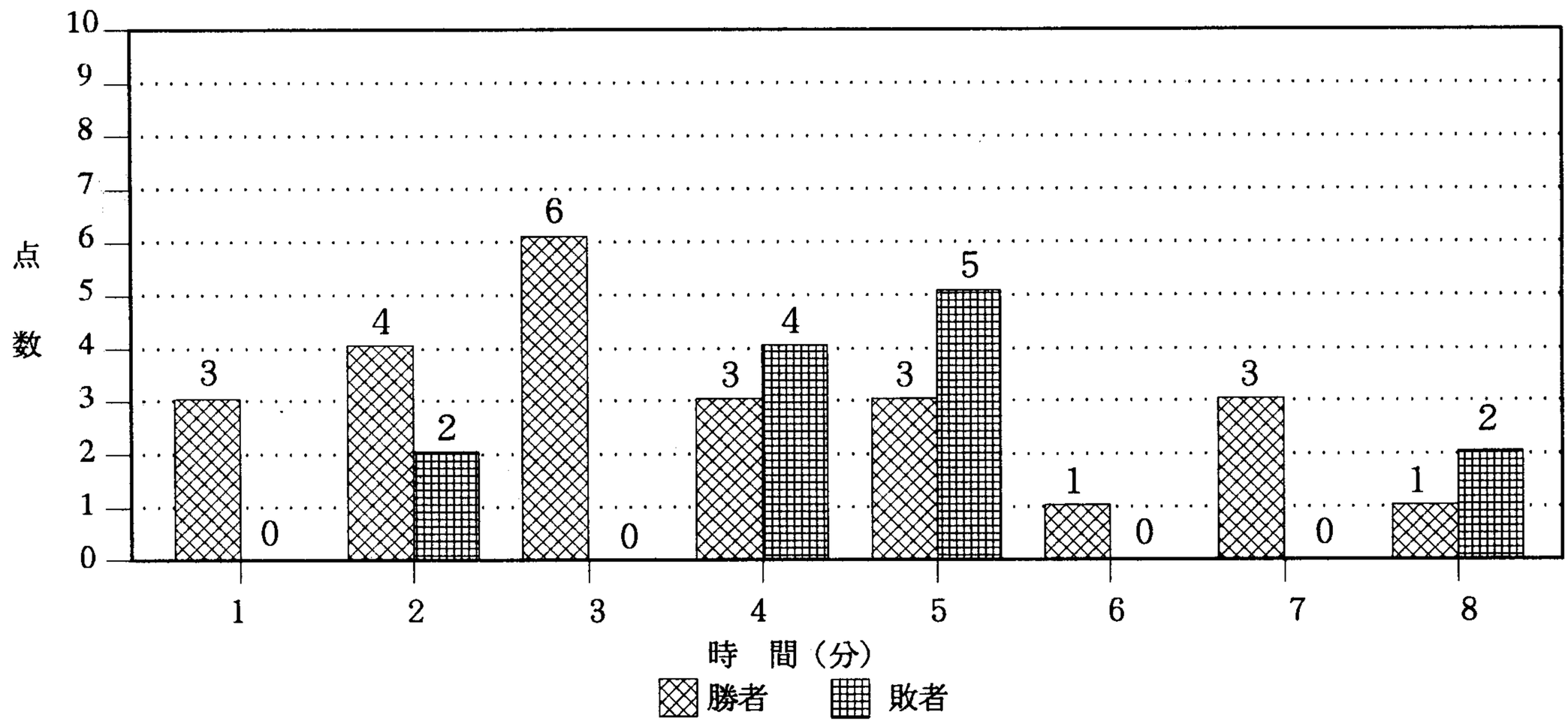

図7　試合時間における１分毎のスタンドの取得経過（国内選考試合）

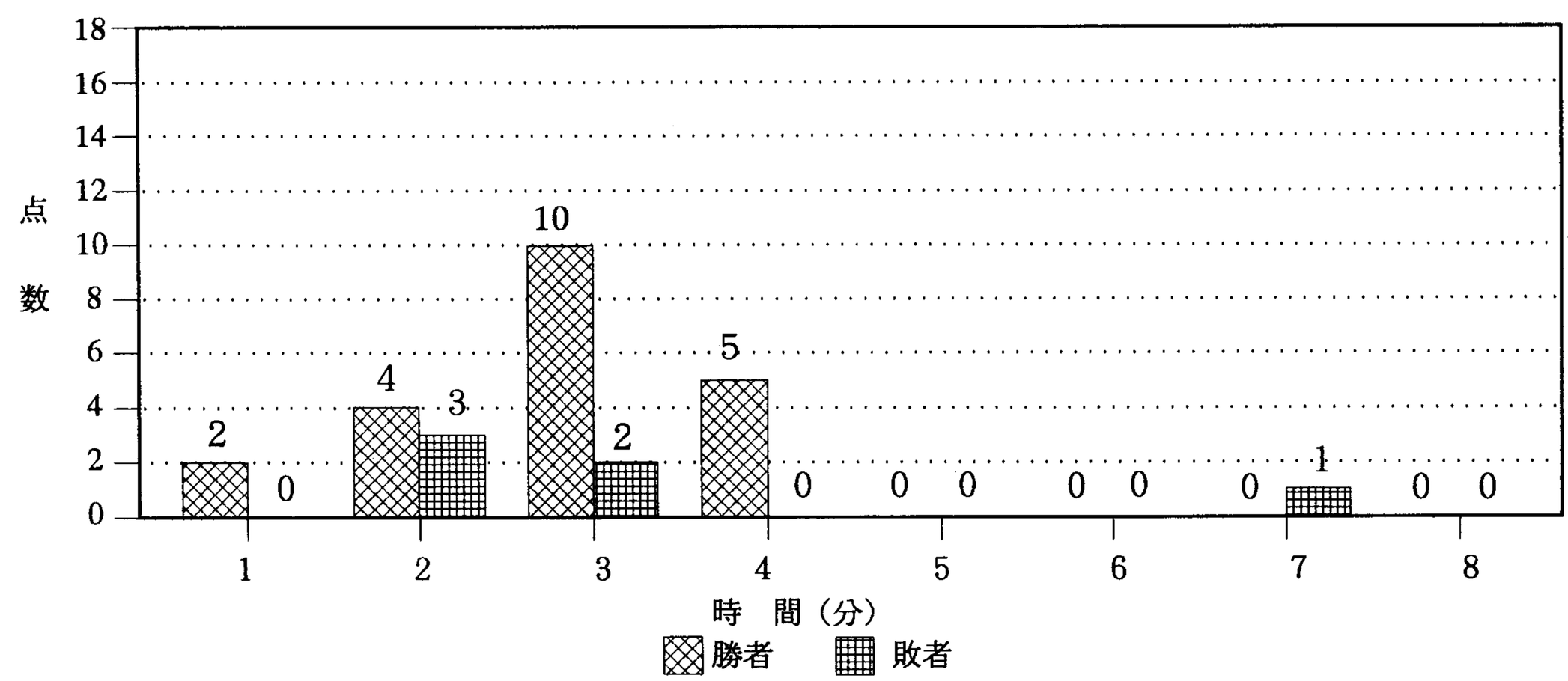

図8　試合時間における１分毎のグランドの取得経過（国内選考試合）

が8種類の技術を使用していた。頻度数では、片足タックル、両足タックルでの攻撃が高く、勝者選手では全体の60％を占め、取得点でも全体の50％以上を占めていた。全日本学生の試合同様、やはりタックルの攻撃頻度が高い者程勝利を勝ち得ていた。グランドレスリングにおいては、横崩しの使用頻度が圧倒的に高かった。

2）取得点と時間経過について

全日本学生レスリングフリースタイル王座決定戦では、国士舘大学対日本体育大学の対戦を比較した。図3・4・5は、試合時間における1分間毎の取得経過である。両大学の総得点数は国士舘大学が21点（スタンド技術点15点、グランド技術点6点）。日本体育大学が48点（スタンド技術点19点、グランド技術点29点、フォール1回とテクニカルフォール1回を含む）であった。団体戦の試合結果は、7勝2敗で日本体育大学の勝利であった。先取得点による勝敗は、国士舘大学は9試合中3試合を先取得点した。日本体育大学は6試合の先取得点であった。6試合を先取得点した日本体育大学は5勝利した。後取得点した試合では2勝利した。国士舘大学は3試合の先取得点で1勝利した。後取得点の試合では1勝利であった。以上の先取得点結果において、先取得点することが勝敗に大きく関与していることがわかった。取得点と時間経過については、試合開始2分以内での取得点は国士舘大学が7点、日本体育大学16点であった。

3分以内での取得点は国士舘大学が15点、日本体育大学が32点であった。5分間の試合時間において、先取得点を2分から3分間の間に取得することが試合を有利に運び勝敗の確率を高めていることがわかった。その代表例を図1の①～③に示した。図1の①は、52kg級の山口選手（国士舘大学4年）対佐藤選手（日本体育大学3年）の対戦での取得点経過である。先取得点を上げたのは山口選手である。試合開始30秒に足首タックルが決まり1ポイント先取、横崩しで2ポイントを上げた。山口選手は、平成5年度全日本学生選手権大会48kg級の優勝者である。今回は1階級上げての団体戦出場である。3ポイントリードしている山口選手であったが、佐藤選手の動きとパワーに圧倒され1分50秒にパッシーブを取られる。パーテールポジションから横崩しで2ポイント失う。佐藤選手は、52kg級全日本学生選手権大会の優勝者である。佐藤選手は、2分30秒に片足タックルからゴービーハインド（背後に廻る）を連続連取した。佐藤選手は、山口選手の攻撃力をパワーと気迫で止めた。佐藤選手の試合展開となり両足タックルと腕取り返しで3ポイント連取した。残り5秒で両足タックル1ポイントを追加し試合終了。結果は、8対3で佐藤選手の判定勝ち。図1の②は、68kg級の和田選手（国士舘大学4年）対小柴選手（日本体育大学4年）の対戦での取得点経過である。試合開始10秒に小柴選手が片足タックルで1ポイント先取した。しかし、1分03秒に和田選手の飛行機投げ3ポイントが決まった。その後2分間の組み手争いの攻防の末に、和田選手得意の片足タックルで1ポイント追加した。この時点で9階級中4階級を日本体育大学が勝利している。この68kg級を落とすと国士舘大学の敗戦となる。残り1分で小柴選手の片足タックルからの猛追があったが、和田選手の気迫がグランドの攻撃を封じた。和田選手の勝因は、飛行機投げ3ポイントを上げた時点で試合のペースを組み立てられた結果と言える。図1の③は、74kg級の友寄選手（国士舘大学3年）対片山選手（日本体育大学4年）の対戦での取得経過である。試合開始早々片山選手が友寄選手の投げ技を押さえ1ポイント先取、防御されることなく横崩しで2ポイント追加しているのが見られる。片山先取は攻撃の手をゆるめず、1分25秒にパッシーブを取り・ポジションから横崩しで2ポイントを上げる。その後もパーテール・ポジションから横崩し片足タックルから横崩しと連続先取で10ポイント差をつけテクニカルフォール勝ち。片山選手の攻撃パターンは今回の新ルールにマッチした試合展開内容であつた。

図6は、世界選手権大会・国内選考会の試合時間における1分間毎の勝者選手、敗者選手の取得経過を示した。勝者選手の総取得点は45点（スタ

ンド技術点24点・グランド技術点21点）。敗者選手の総取得点数は19点（スタンド技術点は13点・グランド技術点は6点）であった。図7・8は、試合時間における1分間毎のスタンド・グランドの取得点経過である。試合開始1分以内の取得点は、勝者選手が5点、敗者選手が0点である。2分以内では、勝者選手が13点、敗者選手が5点である。3分以内では、勝者選手が29点、敗者選手が7点であった。5分間の試合時間においては、3分間以内で先制取得点することで試合を優位に進めることが出来る。10階級の試合において7階級が先取得点を上げ勝利している。レベルの均衡している今大会は、5試合がオーバータイム（延長戦）によるものである。8分間の試合を2階級が行なった。その2階級2試合に勝利した選手は共に先制取得点を上げている。その代表例を図2の①と②に示した。図2の①は、48kg級決勝佐藤選手（国士舘大学4年）対山下選手（香川県スポーツ振興財団）の対戦での取得点と時間経過である。佐藤選手が開始早々20秒に両足タックルで1ポイント先取する。2分50秒に片足タックルで1ポイント追加して2対0である。山下選手も攻撃はするもののポイントに結びつくことができずに5分間の試合時間終了。オーバータイム（延長戦）に入る。佐藤選手が消極性のパッシーブを受ける。しかし、ディフェンスの固い佐藤選手をグランドでポイントを取ることが出来ない。佐藤選手は3分間のオーバータイム中に3回のパッシーブを受けている。山下選手は、両脇差しから背後に廻って1ポイント取得したのみで3分間のオーバータイムが終了した。

3人の審判（レフリー、マットチャーマン、ジャッジ）団の協議結果、佐藤選手の判定勝ちとなった。図2の②は74kg級決勝平塚選手（日本大学大学院）対小野瀬選手（山梨学院大学3年）の対戦での取得点と時間経過である。小野瀬選手が平塚選手を攻め1分20秒に消極的レスリングのパッシーブを取り、パーテール・ポジションから横崩しで2ポイント取得点している。1分55秒には、平塚選手がパッシーブを取る。パーテール・ポジションより得意技のレッグホールドを2回かけ6ポイントを取る。ディフィカルト・ボーナスポイントが1点づつ追加され8ポイントを上げた。8対2で平塚選手の優勢である。小野瀬選手も残り33秒で反撃するが逆転までには至らなかった。この2試合に言えることは先取得点を上げること。パーテール・ポジションから確実にポイントを取る事が大切である。もし、平塚選手がパーテール・ポジションからのレッグホールドが成功していなければ、勝敗に影響していたであろう。

3）Parterrからの技術展開について

全日本学生レスリングフリースタイル王座決定戦において、試合数9試合の中で消極的レスリングのパッシーブ数が、国士舘大学は10回、日本体育大学が6回であった。国士舘大学は6回にパッシーブをを取りながら、パーテール・ポジションからの攻撃ポイントがゼロポイントであった。対する日本体育大学は10回のパッシーブを取りパーテール・ポジションからの攻撃ポイントは15ポイントであった。その15ポイントすべてが横崩しである。国士舘大学の全試合においてのグランドレスリングのポイントは6点、日本体育大学は33点を取得している。国士舘大学はグランドレスリング特に、横崩しの対策がなされていなかった。今後は、体力づくり・ウエイトトレーニングを徹底して行ない、グレコローマンスタイルの選手および、1、2階級上の選手との攻防戦を行ない横崩し対策を研究する。

世界選手権大会・国内選考会のParterrからの技術展開は、10階級の試合数の中で消極的レスリングのパッシーブ数は、敗者選手が10回、勝者選手は21回も受けている。勝者選手のパーテール・ポジションからの得点は、レッグホールド2回6点とディフィカルト。ボーナスポイント2回2点、横崩し1回2点の合計10点であった。敗者選手の得点は、横崩し2回3点であった。パーテール・ポジションからの技術展開は、学生の試合に比べ技術頻度が少なかった。グランドレスリングに対する対応策が各所属においてかなりの比重で研究がなされている結果といえる。勝者選手の21回のパッシ

ーブについて言えることは、勝者選手がポイントをリードした状況でレフリーの眼にディフェンスしていると見受けられる為である。パッシーブからパーテールポジションの技術展開よりスタンド技術から連系してのグランド技術取得点高い。相手が完全に防御の体勢を整えない状態で技術を展開しているからである。パーテール・ポジションの体勢は、完全に相手からの攻撃を防御する心構えの準備が備わっている。

ま　と　め

1）5分間の試合時間において、全日本学生レスリングフリースタイル王座決定戦と世界選手権大会・国内選考会の試合分析結果から次の知見を得た。

①技術分析について、国士舘大学と日本体育大学共にスタンド技術は、6種類の技術頻度が見られた。その中で、片足タックルの頻度数が80％を示し高得点を上げていた。グランド技術は、日本体育大学の4種類の技術頻度があり頻度数で横崩しが圧倒的に高かった。国内選考会においては、勝者選手のスタンド技術が8種類あった。頻度数では、片足タックル、両足タックルが高く取得点の50％を示した。

②取得点と時間経過については、国士舘大学の総取得点が21点（スタンド技術点15点・グランド技術点6点）であった。日本体育大学の総取得点が48点（スタンド技術点19点・グランド技術点29点・フォール1回・テクニカルフォール1回）であった。先取得点を日本体育大学が9試合中6試合を上げ5階級を勝利した。試合開始2分間以内の取得点数は、国士舘大学17点・日本体育大学16点であった。3分間以内においては、国士舘大学15点・日本体育大学32点であった。先取得点を3分間以内に取得することにより勝敗を大きく左右し勝利する確率が高いことがわかった。国内選考会においては、勝者選手の総取得点が45点（スタンド技術点24点・グランド技術点21点）であった。敗者選手の総取得点は19点（スタンド技術点13点・グランド技術点6点）であった。1分間以内の取得点経過は、勝者選手が5点・敗者選手は0点であった。3分間以内では、勝者選手が29点・敗者選手は7点であった。5分間の試合時間において3分間以内に、先制取得点することが有利に勝敗を左右させていた。10階級の試合で7階級が先取得点を上げ勝利した。

③Parterrからの技術展開について、国士舘大学のパッシーブ取得数が10回あったが、パーテール・ポジションの攻撃ポイントがゼロであった。日本体育大学は7回のパッシーブを取り15ポイントを横崩しのみで取得点した。パーテール・ポジションからの技術展開は横崩しの攻防が主流をなしている。

国内選考会においては、パーテール。ポジションからの技術展開は少なかった。74kg級の平塚選手のレッグホールドプラス・ディフィカルト・ボーナスポイントの技術展開が勝敗を左右した。体力・技術の均衡している階級はパーテール・ポジションからの防御技術が高いことがわかった。

本研究は体育学部附属体育研究所の平成５年度研究助成によって実施した。

参　考　文　献

1) 滝山将剛・伊達治一郎・朝倉利夫・多賀垣雄; レスリングの競技力向上のための攻撃と防御に関する技の研究（第3報）―ロスオリンピック大会でメダルを獲得したFree Style52kg級高田選手・57kg級富山選手・90kg級太田選手の場合―国士舘大学体育学部紀要第11巻 1985.
2) 滝山将剛・伊達治一郎・朝倉利夫・屋比久保・加賀垣雄；レスリングの競技力のため攻撃と防御に関する技の研究（第4報）―日本選手とソ連選手の比較―国士舘大学体育学部紀要12巻 1986.
3) 滝山将剛・伊達治一郎・朝倉利夫；レスリングのルール改正に伴う対応策（1）―試合時間の短縮にどう対応すべきか？―国士舘大学体育学部紀要15巻 1989.
4) 滝山将剛・朝倉利夫・藤田隆和・多賀垣雄；レスリングのルール改正に伴う対応策（2）―試合時間短縮にどう対応すべきか？―国士舘大学体育学部紀要16巻 1990.
5) (財) 日本アマチュアレスリング協会―レスリング国際ルール；1993年